

相模地方の国造・在地首長と古墳

田尾 誠敏

はじめに

古墳時代の終末期にあたる 7 世紀は、奈良県の飛鳥地方（明日香村）に政治の中心が置かれたことから、飛鳥時代とも呼ばれます。この時代を通じて、ヤマト政権は律令国家体制を整えるのと同様に、地方支配を強化していきます。645 年には、ヤマト政権の中枢にあった蘇我氏が宮廷クーデターによって亡ぼされる乙巳の変が起こりますが、この翌年に孝徳天皇によって発布された大化改新詔は、ヤマト政権の地方支配制度にとっても大きな転機となります。

古墳時代のはじめ頃から大化前代までの地方は、在地首長と呼ばれる有力豪族によって支配されていました。これらの有力豪族たちは、ヤマト政権との間に同盟に近い支配関係を結んでいました。埼玉県行田市稲荷山古墳の鉄剣銘文にもみられるように、古墳時代中期以降に、ヤマト政権の地域支配は強まり、古墳時代後期には国造制と呼ばれる支配制度が整えられていきます。この制度は、東は東北地方の南部にまで及びます。

この時代の豪族たちは、血縁に基づいた「氏」という集団を形成して、在地社会の中で人民や上地を支配する一方で、ヤマト政権の下で様々な職務を分担していました。ヤマト盆地周辺に支配領域をもつ葛城、平群、蘇我、物部、大伴などの有力氏族がその代表です。彼らは、臣、連、君、直などの「姓」とよばれる称号を大王から与えられ、代々この「姓」を世襲しました。このような氏姓制度による支配を行う一方で、王権に服属した地方豪族に国造という官職を与えて、従来の土地・人民に対する支配権を保証するようになったのです。その一方で、屯倉とよばれる直轄地を拡大し、地方に対する支配を強めていきました。すなわち、国造制とは、ヤマト政権が在地首長を「国造」という地方官に任命して、間接的に支配する制度といえます。国造制の成立年代は篠川賢さんの見解によると、西日本で 6 世紀中頃に成立し、東国はそれから遅れた 6 世紀の終わり頃に施行されたと考えられています（篠川 1985）。

1. 相模地方の国造勢力

相模地域における国造については、『国造本紀』に記載されている相武国造、師長国造の二国造が知られています。またこれに加えて、鎌倉別という勢力が『古事記』に登場しますが、鎌倉別にみられるワケ姓は天皇系氏族に冠される古い呼称であるとされたり（佐伯 1970）、三浦半島の古墳や地域的特性から先の二国造と鎌倉別を同列に扱うことには問題があるという意見もあり（吉岡 2001）、その存在自体を疑問視する研究者もいます。しかしながら後述するように、有力在地首長の勢力分布や土器の地域相からみると鎌倉から三浦半島部にかけては、両国造とは異なる勢力が存在

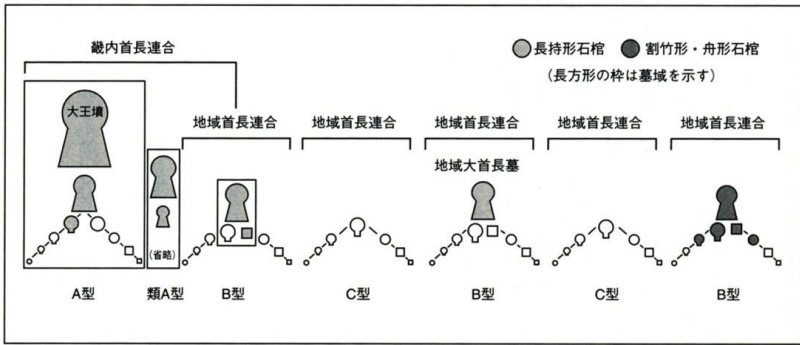


図1 中期古墳の秩序と石棺



図2 埼玉県行田市埼玉古墳群

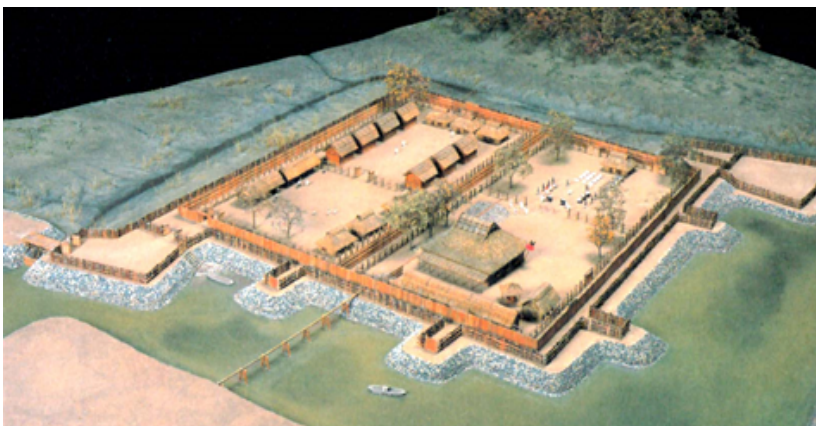


図3 群馬県高崎市三ツ寺I遺跡の豪族居館



図4 埼玉古墳群稲荷山古墳出土銘文鉄剣

したことは明らかでしょう。

このような三つの勢力圏が相模地方に存在したことは、文献史料や遺跡の分布および歴史地理的な観点から鳥養直樹さんによって早くから想定されていました（鳥養 1980）。鎌倉別については触れていませんが、当時は調査事例がまだ少なかったものの、古墳や集落遺跡の分布を取り入れた歴史地理学的な検討のもとに、相武国造の支配領域の中心を相模川左岸に、師長国造の支配領域の中心を酒匂川流域の足柄平野に比定しました。その後、神奈川県内での発掘調査による資料の収集や研究の蓄積がなされてきました。今回の展示に出品されている数多くの出土品やそれらに基づく展示のストーリーを見てもわかるように、国造やそれに連なる在地首長の拠点や動勢が、少しずつ明らかになってきました。有力な在地首長が築いた古墳からは、意匠や技術の面から地方では生産できないような副葬品が出土します。金銀で飾られた装飾大刀、金銅装の馬具、銅製の食器類、銅鏡などの金属製品が特徴的なものとして挙げられます。これらの製品は中央の工房で生産されたり大陸から舶載されたりしたものが、各地の首長に配布されたと考えられます。在地首長が自らの力を示すための威信財として、また在地首長とヤマト政権との関わりを示すものとして捉えることができます。なかでもこれら多種の副葬品がセット関係をもって出土する古墳こそが国造クラスの大首長墓であると思われます。

【師長国造のクニ】

師長国造のクニは、大磯丘陵－秦野盆地から足柄平野にかけての範囲を想定しています。この地域にある古墳や横穴墓の分布を概観すると、①足柄平野西縁部の狩川流域、②足柄平野北端部の松田町・山北町一帯、③大磯丘陵西部、④大磯丘陵東部、⑤秦野盆地とその周辺、の五地域に分けることができます。このなかで特に注意すべき①と③の地域でしょう。①の地域は南足柄市から小田原市北西部にあたりますが、その中でも南足柄市域に所在する古墳は、単龍環頭大刀柄頭を出土した黄金塚古墳、金銀装単鳳環頭大刀・金銅装馬具・挂甲小札が副葬された塚田 2 号墳、金銅装圭頭大刀・馬具が出土したと記録されている塚原古墳群山神塚古墳など、6 世紀後半の範疇で連続する首長墓であると考えられます。これが 7 世紀前半になると、少し南下の小田原市北西部の久野丘陵にその中心が移動します。ここには久野諏訪ノ原古墳群が展開しており、久野 2 号墳では 4 振の装飾大刀が出土しており、久野総世寺裏古墳では大刀に加えて銅鏡が出土しています。また久野中宿古墳では、銜、鏡板、引き手などの鉄製馬具が出土しています。1998 年に調査された天神山古墳では、金銅装を含む三振の大刀と鉄製馬具が出土しました。この古墳は久野丘陵よりも南方の相模湾を望む天神山丘陵縁辺部にあり、首長墓域がさらに南へと広がる可能性を示しました。すなわち、大化前代の国造勢力は足柄平野西縁部にあったといえます。

③の地域における古墳時代後期の首長墓は、①の地域に対して対称的といえます。それは①の地域の高塚古墳に対して、②の地域は横穴墓に象徴されます。古墳時代終末期を代表する墓制である横穴墓は、小田原市東端部から二宮町・大磯町・平塚市西端部にかけて広がる大磯丘陵が、わが国でも有数の横穴墓密集地域として有名です。1189 を数えるこの地域の横穴墓の分布に対して、先の足柄平野西縁部には南足柄市沼田城山横穴墓群の 7 基が知られているにすぎません。足柄平野東縁部の森戸川に面する大磯丘陵西斜面では、畿内産土師器や大刀、馬具などを副葬する田島弁天山横穴墓群等が造営され、7 世紀後半を中心とする在地首長墓域であったことがわかります。この森戸川流域では、国府津三ツ俣遺跡において後期円墳の周溝が複数確認されていますが、墳丘が失わ

た首長の墓域であったことを十分にうかがい知ることができます。登尾山古墳からは金銅装馬具、金銅装圭頭大刀、小型鏡、有蓋脚付銅鉢などが出土し、家形埴輪が立てられていたと考えられます。埴免古墳からは金銅装馬具、銀装大刀、小型鏡が出土しています。他にも栗原古墳から出土したと伝えられる金銅装単龍環頭大刀柄頭や、御領原 2 号墳から出土したとされる金銅装双龍環頭大刀柄頭があり、少し離れた日向渋田 1・2 号墳からも金銅装大刀が出土しています。これらの古墳に続く横穴墓からも、鉄製の輪鏡や壺鏡といった特殊な副葬品を出土するものがあります。このように伊勢原市三ノ宮地区は、6 世紀後半から 7 世紀にかけての相武国造の墓域であったことがわかります。

【鎌倉別のクニ】

鎌倉別の支配領域は、その呼称からも鎌倉から三浦半島にかけての一带であると考えられています。鎌倉別の首長墓では、相武や師長に匹敵するような副葬品を持つ古墳が継続する地域は見つかっていません。一方でこの地域は、大磯丘陵と並び相模地方における横穴墓の密集地域として知られています。これらの横穴墓の中には、大形の円頭柄頭を有する装飾大刀や金銅製弭金具を出土した三浦市江奈横穴墓、銅鉢や素文鏡を出土した横須賀市鳥ヶ崎横穴墓群などが含まれます。また墳丘をもつ古墳では、金銀装斧状鉄製品や金銅製弭金具といった特殊な遺物を出土して注目される切石積み古墳の横須賀市かろうと山古墳があります。特に金銀装斧状鉄製品は、装飾大刀と同様に儀仗に用いられたと思われることから、かなり高位の在地首長墓であると想像されます。

古代史の関和彦さんは、万葉集に収められた相模人の歌に登場する「足柄山」「相模嶺(大山)」「鎌倉山」が、それぞれ相模人の古里観にあらわれる「国神・国魂」が降臨し鎮座する山であり、相模人にとって郷愁を感じる地域のシンボルであると考えました(関 1994)。この山々はまさに国造墓域が築かれた場所から見上げることのできる山で、国造が祀る神の膝元に造墓したことが推察されます。



相模嶺(大山)



伊勢原比々多三ノ宮地区

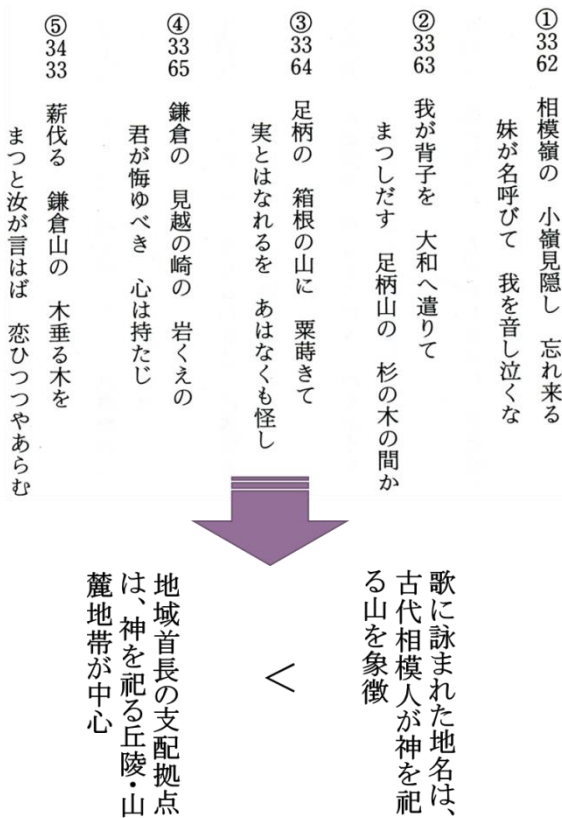


図 8 国造が祀る神の山

2. 在地首長のクニと土器の地域性

考古学の研究において、古代の土器のうち型式変化や地域性、編年の基準に用いられるのは、もっぱら土師器・須恵器の坏類です。古墳時代の相模地方では須恵器を生産している形跡はなく、愛知県や静岡県を中心とする東海地方のものがほとんどです。一方で当該期の土師器坏は、同じ住居内から出土した土師器坏を比較しても、器形、大きさ、胎土において個体差が大きく、地域ごとのまとまりを見て取ることは困難です。

お隣の武蔵地方では『国造本紀』に示されるように、胸射、無邪志、知々夫の三国造が支配していました。これら武蔵地方の国造に関する有名な記述に、『日本書紀』安閑天皇元年（534）の記事があります。いわゆる「武蔵国造の乱」といわれる在地首長の勢力争いです。この記事には、ヤマト政権が武蔵国造の勢力争いに介入したお礼に、横淳（よこぬ）・橘花（たちばな）・多氷（おほひ）・倉櫟（くらす）の四ヶ所を屯倉として献上したということが書かれています。鈴木靖民さんや村田文夫の説をとると、この四ヶ所の屯倉は全て武蔵南部にあったこととなります（鈴木 2014・村田 2010）。確かにこの時期の多摩川・鶴見川流域で、規模や分布などの点で古墳の勢力が衰えることは早くから指摘されてきました。また、武蔵地方で出土する土師器坏をみた場合、武蔵北部の有段口縁坏、中部のは比企型坏という極めて規格化された土器が生産されていたにもかかわらず、南武蔵では土師器坏に規格性が乏しく、好き勝手に作ったように見えます。南武蔵にはヤマト政権の直轄地である屯倉が置かれたため、規格性のある土器を生産して貢納させるような力のある在地首長がいなかったと考えることもできます。相模地方も、ヤマト政権との関わりが強かったが故に、同様の状況があったのかもしれない。

そこで、相模地方で土器の地域性を探るために、生産や流通の上でより在地性高い煮沸具の甕を取り上げてみました。県央部の伊勢原市域から平塚市域よりも東の相模平野では、口縁部をヨコナデで調整し、胴部から底部にかけてはヘラケズリ整形を施す土師器甕が広く用いられています。このようなヘラケズリ整形の甕は、武蔵南部で一般的に出土する製品と共通するものがあります。こうした、ヘラケズリ整形を施す土師器甕が、相武国造領域を代表する甕なのです。これに対して、秦野盆地から大磯丘陵以西の地域においては、土師器甕の胴部にハケ整形が施され、底部に木葉痕が残るといった特徴が見いだせます。すなわち、ハケ整形の土師器甕が師長国造領域を代表する甕なのです。土器の器面にあらわれる「ヘラ」と「ハケ」の痕跡の違いは、調整に用いる板状の工具に柃目板を用いるのか、あるいは板目板を用いるのかという差異であり、土器作りに使用する工具の違いが明らかな地域差として認められるということです。さらに両者のプロポーシヨンの差も明確で、師長のハケ整形甕は寸胴が普通ですが、相武のヘラケズリ整形甕は背が高いスマートなプロポーシヨンを持つものが主体です。では、もう少し細かく、師長のハケ整形甕と相武のヘラケズリ整形甕の分布の境はどこに求められるのでしょうか。これはとりも直さず、師長国造のクニと相武国造領域のクニの境をあらわす可能性を秘めています。両者の甕の分布をこれまで行われてきた発掘調査での出土例を基にプロットしてみると、およそ大磯丘陵の東端から秦野盆地と北金目台地までがハケ整形甕の主体的な分布範囲となります。一方、北金目台地の北東に広がる低地部から平塚市街の砂丘地帯にかけてと善波峠よりも東側の伊勢原市以東が、ヘラケズリ整形甕の分布範囲になるようです。すなわち、金目川右岸に北金目台地を加えた以西が師長の領域となり、それよりも東が相

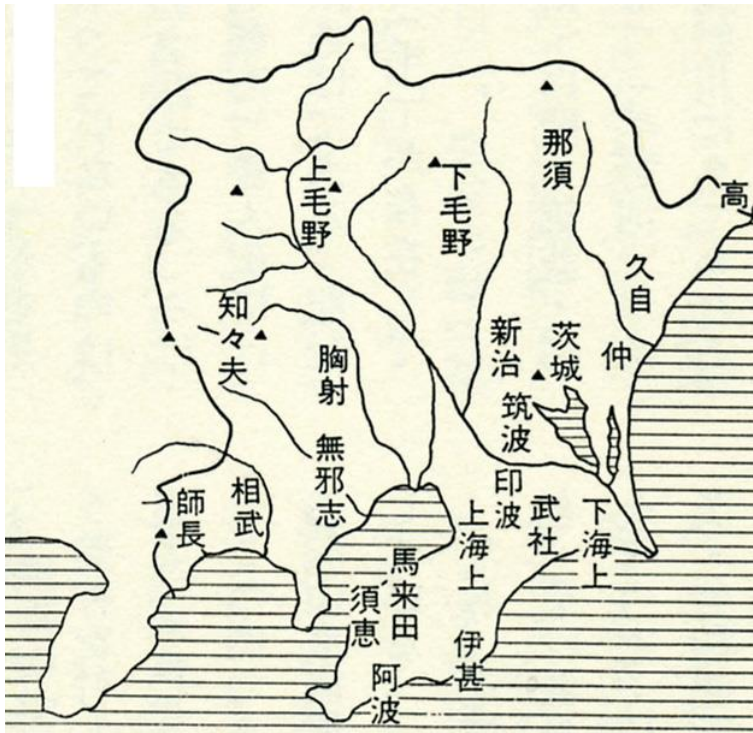
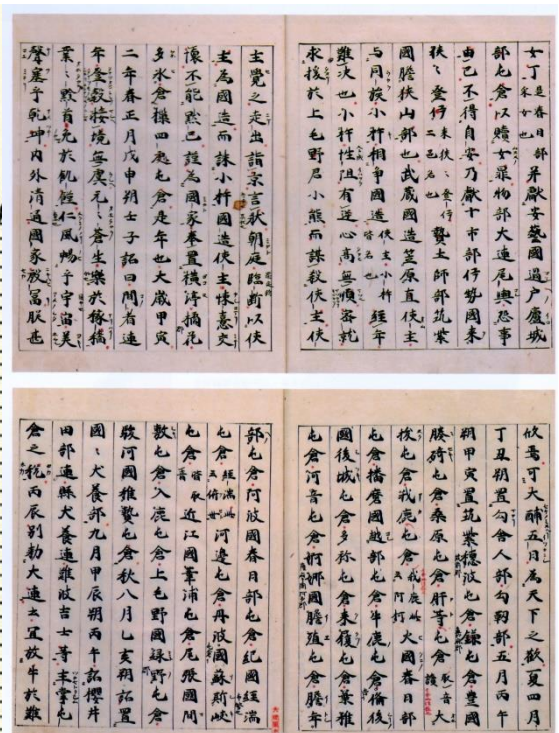


図9 関東地方の国造分布図

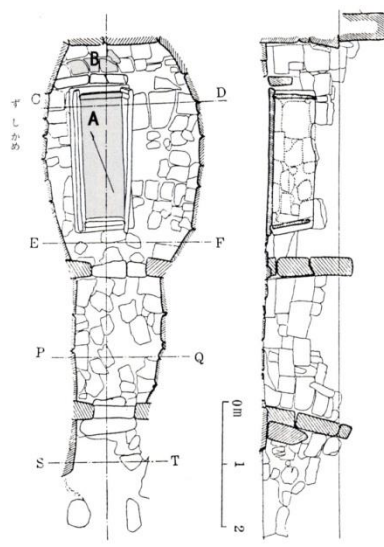


【日本書紀(下巻石本)】天文9年(1540)、天理大学附属天理図書館蔵(上:「武蔵国造の乱」記事、下:屯倉設置記事)

図10 日本書紀にみられる武蔵国造の乱 記事



図11 安閑天皇陵



第六天古墳の横穴式石室 幸区 A・11体の人骨の発見場所、B・鉄刀12本の発見場所 調査報告書に加筆



図12 武蔵国造の乱関連図

図13 川崎市第六天古墳石室実測図



武蔵国造分布図と四屯倉の位置 1・橋花、2・倉樺、3・横淳、4・多氷、(●印第六天古墳) 関和彦「武蔵国造と多摩」掲載図に加筆

図 14 武蔵国造分布図と四屯倉の位置

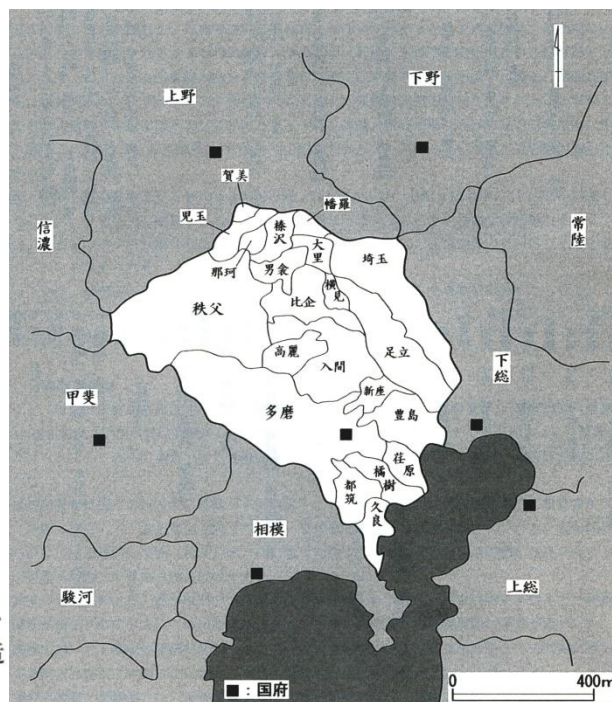
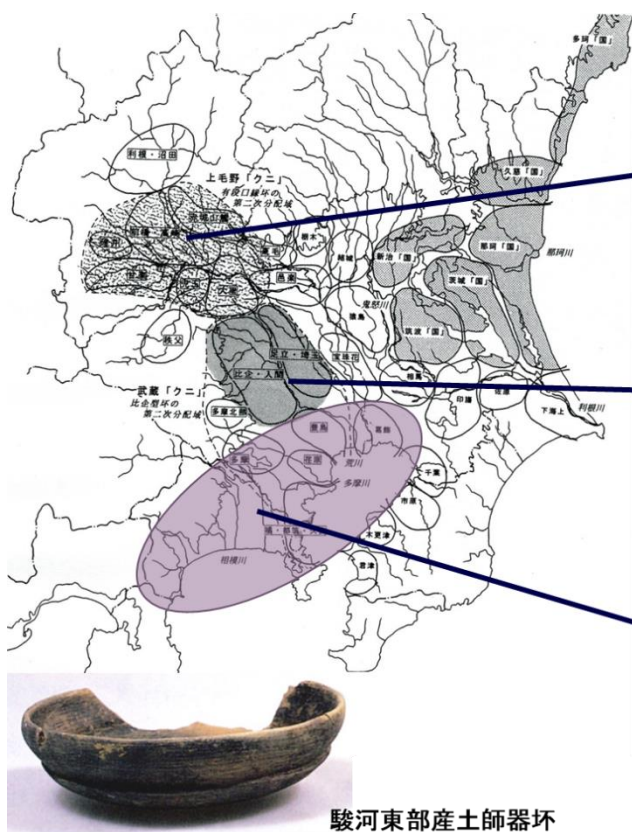


図 15 令制下における武蔵国の郡



有段口縁杯



比企型土師器杯



駿河東部産土師器杯



相模・南武蔵の土師器杯

図 16 武蔵・相模地方における6・7世紀の土器の地域性

武国造の領域ということになります。

では、もう少し細かく、師長のハケ整形甕と相武のヘラケズリ整形甕の分布の境はどこに求められるのでしょうか。これはとりも直さず、師長国造のクニと相武国造領域のクニの境をあらわす可能性を秘めています。両者の甕の分布をこれまで行われてきた発掘調査での出土例を基にプロットしてみると、およそ大磯丘陵の東端から秦野盆地と北金目台地までがハケ整形甕の主体的な分布範囲となります。一方、北金目台地の北東に広がる低地部から平塚市街の砂丘地帯にかけてと善波峠よりも東側の伊勢原市以東が、ヘラケズリ整形甕の分布範囲になるようです。すなわち、金目川右岸に北金目台地を加えた以西が師長の領域となり、それよりも東が相武の領域になります。秦野盆地や北金目台地が律令制下の余綾郡幡多郷や金目郷に含まれるし、秦野盆地から善波峠を越えると大住郡榑崎郷に、北金目台地を下ると大住郡片岡郷になることから、この境界は律令制下の大住・余綾両郡の郡界に踏襲されることがわかります。

一方、相武と鎌倉の土師器甕はいずれもヘラケズリ整形を用いていますが、プロポーションによって2つに分けることができます。相模平野で出土する甕は、胴部の上位 1/3 のあたりに最大径があったり口縁部と胴部最大径がほぼ同じであったりするものが多いようです。これに対して三浦半島では、口縁部に最大径がくるような逆円錐形に近いラッパ状のプロポーションをもつ甕が多い傾向にあります。藤沢市と鎌倉市の境にある鎌倉市手広八反目遺跡や津西白山遺跡は、まだ相武の領域です。これが北鎌倉に近い丘陵地帯の台山藤源治遺跡では、甕の組成にラッパ状のものが加わります。

古墳時代後期に相模地方へ搬入された土師器には、武蔵中部の比企型坏、武蔵北部から上野南部の有段口縁坏、駿河東部の駿東産坏・駿東型甕があります。それぞれの土器は極めて特徴が異なりますが、これらの搬入状況が相模地方の中で小地域ごとに異なるのです。神奈川県西部では、隣接する駿河東部から搬入された駿東産坏や駿東型甕が圧倒的多数を占めます。一方、相模平野では比企型坏の出土が目立ちます。これは武蔵地方から陸路で運ばれたのでしょう。相模地方の中で特殊な状況を示すのが三浦半島です。半島の各所で、比企型坏に加えて有段口縁坏が多く出土します。このような状況は元荒川流域の様相と近似しているので、それぞれの生産地から元荒川一帯の遺跡に土器が集積されて、川を下り東京湾を経由して舟で持ち込まれたのでしょう。奈良時代前半頃の、三浦半島では半球形の北武蔵型坏と呼ばれる土師器坏が多く出土します。このことやラッパ形のヘラケズリ甕が同地域の甕と類似するのも、両者の強い交流を物語っています。

3. 国造と在地首長の領域支配

横浜市の大部分と川崎市を除く相模地方を国造クラスの三大勢力が治めていたわけですが、こうした有力首長は、北関東では群馬県高崎市の三ッ寺 I 遺跡のように、立派な居館を拠点としていました。相模地方の在地首長は、古墳時代前期以来、ヤマト王権との結びつきが強いと考えられていますが、それが故に北関東の首長たちほど強い勢力ではないととることができます。そのため、堅牢で壮大な居館は造らなかったのではないかとされています。比々多・三ノ宮の古墳群から比較的近い場所にある伊勢原市坪ノ内久門寺遺跡では、大量の土師器や須恵器を出土した大型住居があります。古墳に副葬するような土器で祭祀を行った可能性があり、近隣に首長の居宅があるかも

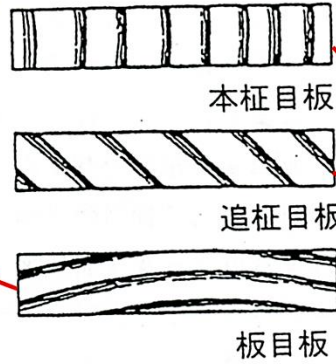
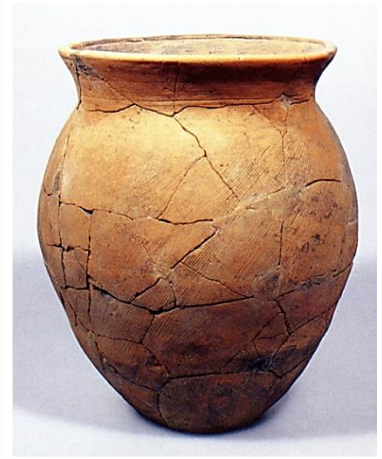
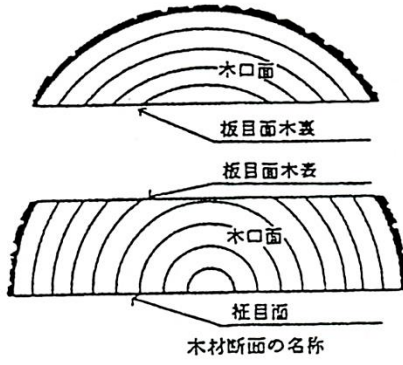


図 17 ハケ整形甕とヘラケズリ整形甕

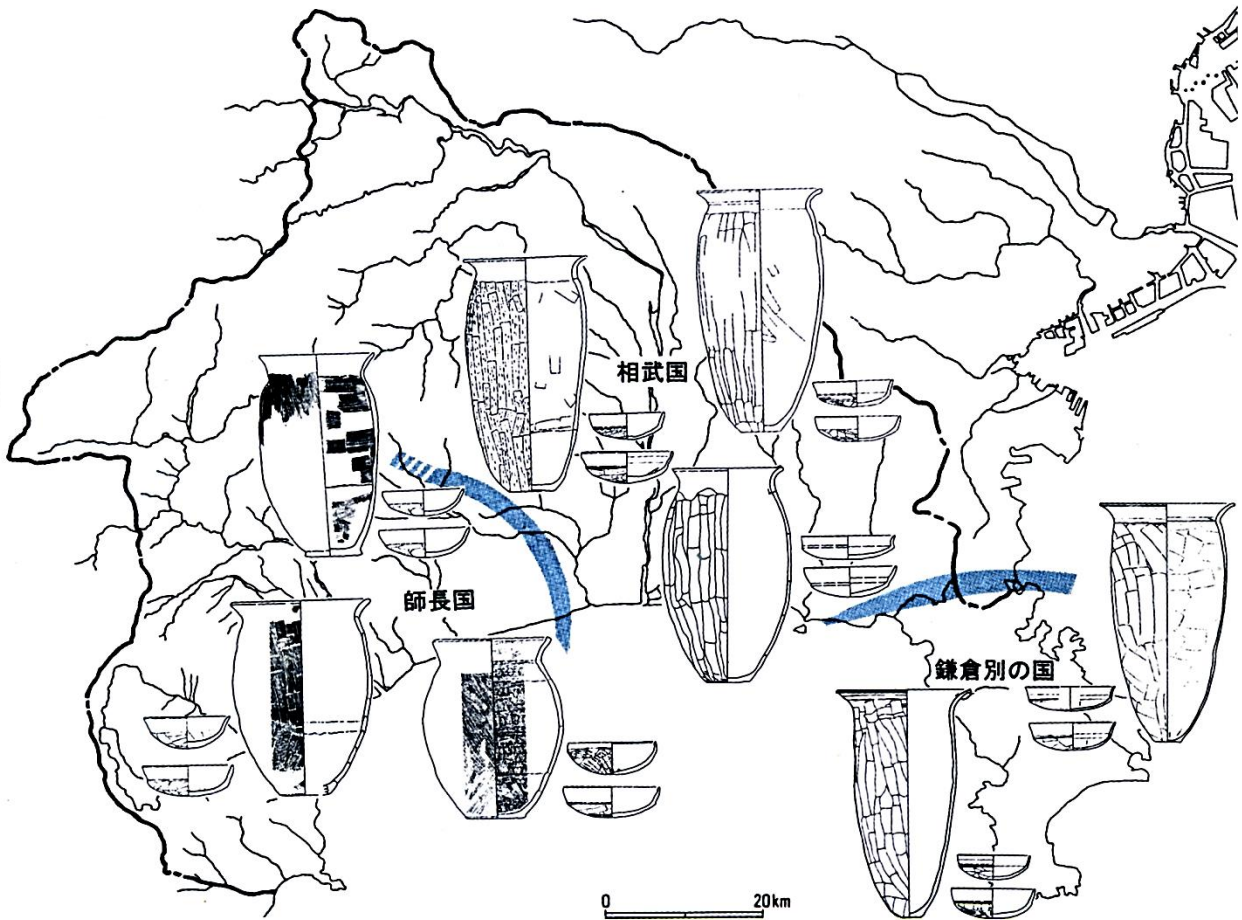


図 18 相模地方における土師器甕の地域色

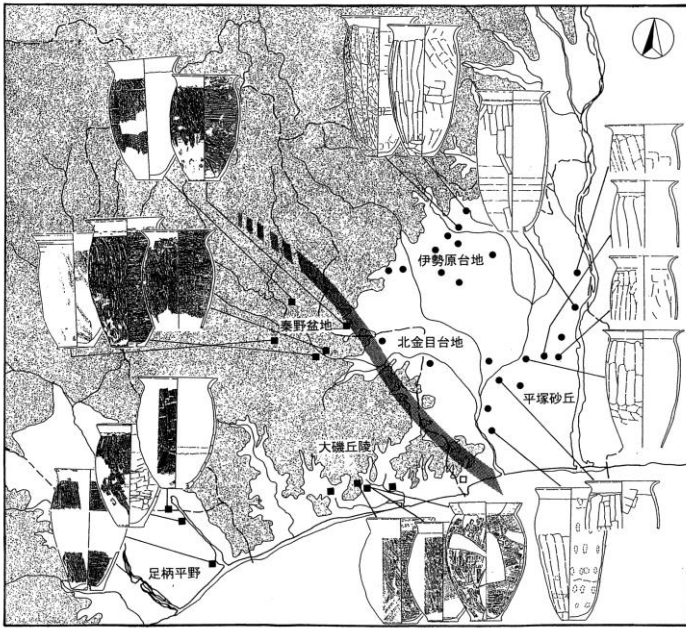


図 19 土師器甕にみる師長・相武の領域界

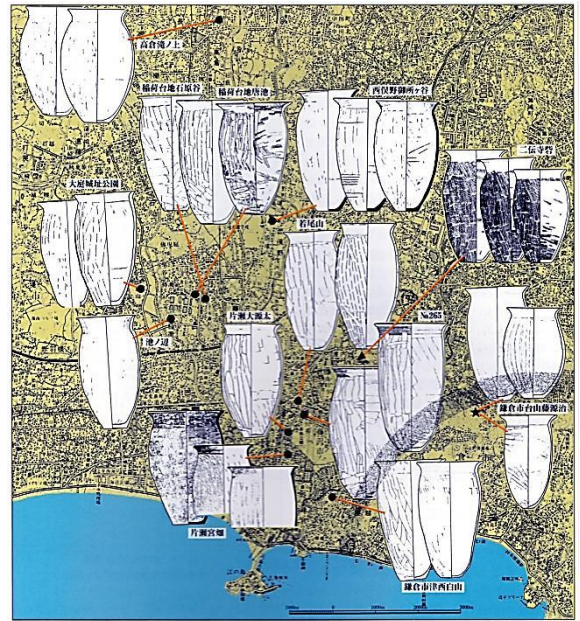


図 20 土師器甕にみる相武・鎌倉の領域界

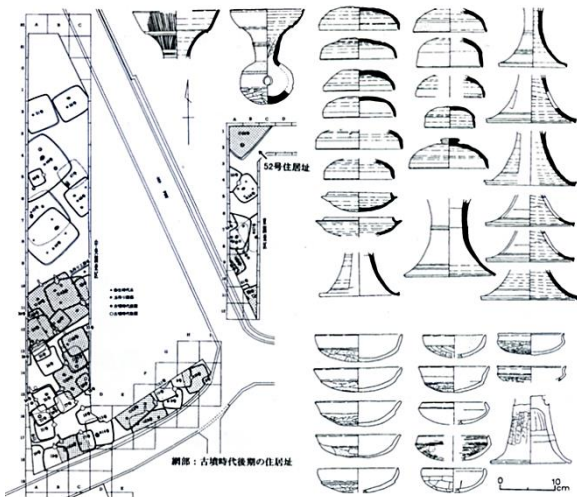


図 21 相武国造の首長集落？ 伊勢原市久門寺遺跡

しれません。また秦野市桜土手古墳群や厚木市山麓部の古墳は、国造クラスやそれに次ぐような有力首長は、独立した古墳群を営み、別の場所に居宅を構えていたと考えられます。

師長国造のクニでも示したように、7世紀前半以前にさかのぼる拠点集落や有力首長墓が国造墓域とは異なる場所に営まれていたことがわかります。このことから、各国造の領域内には国造家ともいべき勢力とは別の有力豪族や中小豪族がいたことは想像に難くありません。大上周三さんは、このように長期間継続する集落が、在地豪族の本貫地の一面に当たる可能性があり、地域の拠点的な集落であると考えています（大上 2001）。こうした集落には、集落の近郊に中規模の墳墓群をとまなうものや、集落内に1～数基の古墳を取り込むものがあります。

前者は、いくつかの集落が中規模の墳墓群を支えるパターンであると考えられます。厚木市内の相模川西岸支流流域に広がる墳墓群がこの代表例です。石室奥壁に複数本の大刀を立てかけるような特徴的な埋葬儀礼を行い、質的にも国造墓域に準ずる継続性や副葬品を備えます。ここには、相武

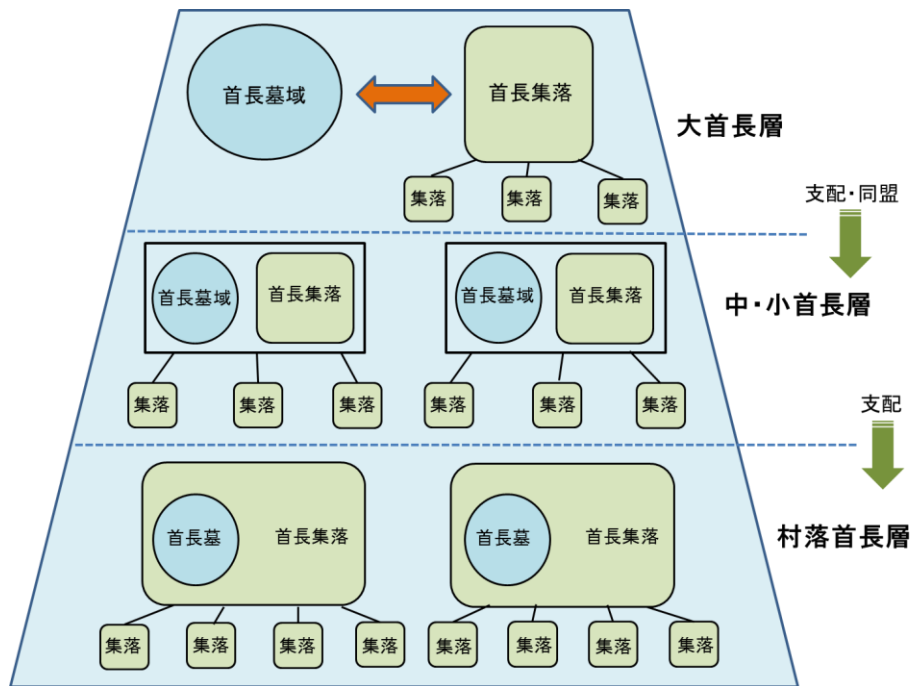


図 22 相模地方の首長による領域支配モデル

国造に肩を並べる伝統的な勢力が存在していたと思われます。相模川支流の丘陵上にある集落が、これらの古墳群を支えたのでしょう。また、相模川東岸の自然堤防上に造営された寒川町宮山中里古墳群は、前方後円墳 1 基を含む 6 世紀後半から 7 世紀初頭にかけて営まれた小規模な古墳群です。前方後円墳を含むとはいっても次に示す古墳の同様に石室を築く力はなく、トップクラスの在地首長との間には格差があったとみることができます。このような古墳にも威信材としての副葬品がみられますが、概して国造墓のように高位の副葬品をセット関係を持って有するものではなく、優品は単品であることが多いようです。

後者のように集落の近辺や集落に接するようにして造営される古墳には、平塚市新町遺跡、厚木市川田前遺跡、相模原市東原遺跡、藤沢市片瀬大源太遺跡、同下ノ根遺跡などが挙げられます。村落に接して小規模の造営した首長は、墳墓を造営する力をもつものの 1~数集落を束ねる村落首長の域を出ない勢力と思われます。このような古墳には、主体部の石室が発見されません。小首長たちには、石室を造るだけの力がなかったのでしょう。

このように比較的広い領域を支配するために、師長国造は領域内の中小首長たちと支配関係あるいは同盟関係を結んでいたと思われます。上は国造に準ずるような有力首長から、下は集落の近辺や集落に接するようにして石室のない小規模な古墳を造営する村落首長クラスに至るまで、国造にあたる大首長を頂点とするピラミッド型の領域支配が行われたと想像されます。

引用・参考文献

- 荒井秀規 1998 「神奈川古代史素描」『考古論叢神奈川』第 7 集、神奈川県考古学会
 大上周三 2001 「律令制成立前後の集落様相」『東海大学校地内遺跡調査団報告』9・10
 佐伯有清 1970 「日本古代の別（和気）とその実態」『日本古代の政治と社会』吉川弘文館

- 関 和彦 1994「古里・在地社会論」『古代東国の民衆と社会』名著出版
鳥養直樹 1980「律令国家形成期における在地首長の動き」『古代天皇制と社会構造』校倉書房
吉岡康暢 2001「古代東国の首長・村民と飛鳥の王権」『東海大学校地内遺跡調査団報告』9・10

挿図出典

- 図1：和田晴吾「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館、図6
図2：藤野龍宏監修 2016『埼玉の考古学入門』さきたま出版会、p.119 写真
図3：若狭徹 2004『古墳時代の地域社会復元 三ツ寺 I 遺跡』新泉社、図12
図4：大田区立郷土博物館 1995『武蔵国造の乱』東京美術、p.78 左写真
図5：大磯町 2007『大磯町史 10 別編 考古』図7-14（田尾作成）に写真を追加
写真は、東海大学校地内遺跡調査団 1999『相模国のはじまり』（田尾撮影）
図6：東海大学校地内遺跡調査団 1999『相模国のはじまり』p.7 図（田尾原図）と同掲載写真で構成
図7：田尾誠敏 2001「VII 相武国の様相（2）」『相武国の古墳』平塚市博物館、第6図
図8：関和彦 1994「古里・在地社会論」『古代東国の民衆と社会』名著出版の見解を基に田尾作成
図9：尾崎喜左雄「毛野の国」『古代の日本7 関東』角川書店、p.95 図
図10：大田区立郷土博物館 1995『武蔵国造の乱』東京美術、p.16 写真
図11：大田区立郷土博物館 1995『武蔵国造の乱』東京美術、p.7 左下写真
図12：大田区立郷土博物館 1995『武蔵国造の乱』東京美術、p.5 図
図13：村田文夫 2010『川崎・たちばなの古代史』有隣堂、p.152 図
図14：村田文夫 2010『川崎・たちばなの古代史』有隣堂、p.148 図
図15：埼玉県考古学会 2002『坂東の古代官衙と人々の交流』p.137 資料集扉図
図16：田尾作成
左図は、田中広明 1995「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」『東国土器研究』第4号、
東国土器研究会、第2図に加筆
写真は、東海大学校地内遺跡調査団 1999『相模国のはじまり』（田尾撮影）
図17：田尾作成
中央図は、横山浩一 1979「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』23、第4図（後、
横山 2003『古代技術史攷』岩波書店 所収）
写真は、東海大学校地内遺跡調査団 1999『相模国のはじまり』（田尾撮影）
図18：東海大学校地内遺跡調査団 1999『相模国のはじまり』p.7 図（田尾原図）
図19：田尾誠敏 2001「VII 相武国の様相（2）」『相武国の古墳』平塚市博物館、第3図
図20：藤沢市 2014『大地に刻まれた藤沢の歴史IV』図73（田尾原図）
図21：（左）田尾誠敏 2001「VII 相武国の様相（2）」『相武国の古墳』平塚市博物館、第4図
（右）東海大学校地内遺跡調査団 1999『相模国のはじまり』p.10 左下写真（田尾撮影）
図22：藤沢市 2014『大地に刻まれた藤沢の歴史IV』図78（田尾原図）